

ピカイチ先生の  
生活経営セミナー

2018年10月  
自律分散の時代  
(② 原発避難と家庭)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038  
福島県南相馬市原町区日の出町167-3  
info@next-life-consult.com



ピカイチ先生

ピカイチ先生

検索

# 災害時、なぜ日本人は逃げないのか？

洪水、津波、地震などの災害に遭うとき、日本の住民はなかなか逃げようとしていない。その理由を、地学の専門家が説く(「投資は頭だ！」大竹愼一著より)。

「なぜ逃げなかったのか？」と聞くと、以下の2つの答えが非常に多い。

「避難勧告、避難命令が出なかったからだ」

「自分だけは大丈夫だろうと思っていた」

東日本大地震と原発事故を体験した者として、反論の余地は全くない。ただ反省するのみである。

前者には、自分の判断で、危険を察したから逃げようとする発想がない。後者には、あまりに不安になって対策を打つこと自体が、あるいは避難すること自体が怖い。だから動かない。そういう心理的要因がある。

ニューヨークで活躍するファンドマネジャー大竹愼一は語る。

プロはいろいろなポジションを組んで、当たれば放っておくけれど、外れたらさっさと損切りして逃げる。これができるかどうか、プロかアマかの大きな差である。アマは、外れたときに逃げられず、損を大きくするばかりで、ひどい人は破産に追い込まれる。

『ピカイチ生活経営便り』(2012.10.28)より

# 大震災から4年、家族の絆

東日本大震災から4年、政府追悼式典における遺族代表(当時15歳女性)の言葉である。

あの日、中学校の卒業式が終わり家に帰ると大きな地震が起き、津波が一瞬にして私たち家族5人をのみ込みました。

流された後、運よくがれきの山の上に流れ着きました。その時、足元から私の名前を呼ぶ声が聞こえ、見ると変わり果てた母の姿がありました。

がれきをよけようと頑張りましたが、私一人にはどうにもならないほどの重さ、大きさでした。母を助けたいけれど、ここにいたら私も流されて死んでしまう。

「行かないで」という母に「ありがとう、大好きだよ」と伝え、近くの小学校へと泳いで渡りました。(03/12毎日新聞より)

『ピカイチ生活経営便り』(2015.03.16)より

# 津波避難の現実

## ■ 車避難中、避難中のお年寄りと出くわす


- ・家族4人(車定員5名)で避難中
- ・年寄り2人が徒歩で避難

→ あなたはどうしますか？

## ■ 津波からの避難車、踏切で長蛇の列

- ・フェイルセーフ(遮断機は下りたまま)

→ あなたはどうしますか？



異常時の安全は、機転が勝負

# 飯舘村に何が起きたのか (1/2)

放射性雲は村の上空に達したあたりで、水滴を帯びて雨や雪になり、地上に降り注ぎました。村人に聞くと「15日は雨が降っていた。途中で雪に変わった」といいます。

国も県も、この危険を住民に知らせませんでした。

落ちてくる雨や雪には高濃度のヨウ素やセシウムが含まれていました。何も知らない村人たちは、雨や雪に濡れるのもかまわず、避難者の車の交通整理をしたり、食料や毛布を運んだり、炊き出しをしたりしていました。積もった雪で遊ぶ子どもたちもいました。

「村内で毎時40マイクロシーベルトを超える放射線量が検出されたいい」

数日後、そんな噂がささやかれ始めます。しかしなお、公式の知らせはありません。

最終的に村人が「被曝」を知るのは20日夜でした。村の上水道水源から、基準を超えるヨウ素が検出されたのです。

(次頁につづく)

『福島 飯舘村の四季』(2012.06.24 烏賀陽 弘道)より

# 飯舘村に何が起きたのか (2/2)

「水を飲むな！」

役場から広報車が走り、集落ごとに緊急事態が告げられました。ペットボトルの水が運び込まれ、給水車が村外から駆けつけました。

しかし、時すでに遅し。村人は汚染された水でお茶を沸かして飲み、煮炊きをしていたのです。1300人いたと言われる避難民も、そうでした。

村人は呆然としました。一体どうすればいいのか。

3月末にIAEA(国際原子力機関)の調査団が来ました。そして村人に避難するように勧告したのです。それでも、原子力安全保安院は「避難が必要なデータは見つからなかった」と記者会見で言い続けました。

村人の希望が打ち砕かれたのは、4月22日でした。

国が「全村避難」を決定したのです。「6000人全員村から出る」「別の場所に住め」と言うのです。

『福島 飯舘村の四季』(2012.06.24 烏賀陽 弘道)より

# 略奪はなぜ少なかったのか (1/2)

続いて福島県原発被災地に移って取材を始めてみると、また違った事情が見えてきた。福島第一原発から半径20キロの「警戒区域」は強制的な避難で人がいない空白地帯になっていた。

道路は警察が封鎖し、許可証なしに入ると逮捕された。その外側も自主的に避難した住民が多く、商店はほとんどが閉まっていた。食事ができる場所を見つけるのも一苦労だった。

「昼も夜も人がほとんどいない」というのは津波被災地との大きな違いだった。

地元住民の車に乗らせてもらって、無人の20キロライン内側に入って取材したことがある。道路も街も人影がなく、がらんとしていた。国道沿いにコンビニが見えた。近寄ると、入り口のガラス扉が割れている。中を見たら、ATMが叩き壊されて現金が抜き取られていた。

さらに調べると、カップ麺やスナック菓子などが棚からなくなり、あるいは封を切られて床に散乱していた。最初は「動物や鳥が入って食ったのかも」と持ったが、ちがった。歯ブラシや歯磨き、冷蔵ケースのペットボトル飲料、たばこ、エロ本などが集中的になくなっていったからである。

(次頁につづく)

『フェイクニュースの見分け方』(2017.06.20 烏賀陽 弘道)より

## 略奪はなぜ少なかったのか (2/2)

後に、山形県などに避難した避難者に合って取材を続けると、原発直近に住んでいた家族から、こんな話を聞いた。

水素爆発のテレビニュースを見て、一家5人軽四輪に乗って脱出した。しかし急だったので食料や水の持ち合わせがない。商店も避難して閉まっていた。

日が暮れ、行く先もわからない。この先、水や食料が入手できるかどうかわからない。やむをえず、やはり避難で無人になったコンビニから家族の食料と飲み物を失敬した。

私が目撃したコンビニとは違う場所から避難してきた人たちだった。が、私は「なるほど、そういうことだったのか」と思った。私が言葉から想像していた「略奪」とは趣が違う。

私も同じような切羽詰まった状況に追い込まれ、無人になったコンビニを見れば「やむをえず」何かを盗むことはありえると思った。

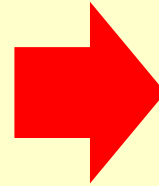
『フェイクニュースの見分け方』(2017.06.20 烏賀陽 弘道)より



# 原発避難の現実

## ■ 避難時の制限 ■

- 避難場所が不明
- 道路状況が不明
- ガソリン切れで終了
- 事故ると終了



- 移動は昼間のみ
- 目的地は実家(東京)
- 移動期間は1週間

## ■ 避難時の持物 ■

【衣】着替え(1回分)

【医】救急箱、持病薬、保険証

【食】水、米、根菜、冷蔵庫内のモノ、菓子

【職】パソコン

【住】寝袋、炬燵掛布団、灯油、カセットコンロ

【充】(なし)

【他】現金、通帳、印鑑、リュックサック

## ■ 避難時の心得 ■

『もしもの場合は、自分で考え、一人で逃げろ！』

『そのときには、パパもママも置いて逃げろ！』

『パパもママも精いっぱい逃げるから！』

『わかったかな？』